



偶然の出会い

鳥山 定嗣（フランス語フランス文学）

最近フランス語の代わりにフラ語という呼び名が流行しているようで、仏語という呼称に慣れてきた私はこの新しい響きに接するたびに軽い驚きをおぼえます。なにかいい加減なようなあるいは楽しそうな感じがするのはなぜだろうとフラゴフラゴと繰り返してみると、ふらふら、フラダンス、フラメンコ、フラミンゴといった言葉が渦巻きはじめます。フランスという語はまた、ふらんす、仏蘭西、FRANCE と書きかえるだけで服を着替えたかのように印象が変わる一方、france という音は danse や élégance と韻を踏むか



南仏の港町セットの「海辺の墓地」

とおもえば transe や ambulance とお押韻し、偶然の音の一致から発する意味のひびきはさまざまです。日本語はあまり脚韻に馴染みがありませんが、「^{なめくじ}蛞蝓のろのろなにぬねの ^{なんど}納戸にぬめってなにねばる」（北原白秋）におけるリズムミカルなナ行のねばねば感には他の言語には翻訳しがたい独特な味わいがあるでしょう。言葉には意味だけでなく、それを盛る器というべき音やリズムがあります。私たちは意味こそ本質的なもので、音やリズムは意味に付随するものと考えがちですが、確かに存在しているのはむしろ音やリズムの方であり、そこに意味があると信じているのかもしれない。ちょうど私たちの体のどこかに心があるように。「——海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある」（フランス語では「母 mère」と「海 mer」が同音で、綴りの上では mère の中に mer が含まれる）という三好達治の言葉にはどんな意味が、どんな心が読みとれるのでしょうか。あらゆる言語の中に偶然の出会いがあり、まったく関係がなさそうな言語どうしも偶然出会うことがあります。そんなのは言葉遊びにすぎないと無視してもなんら日常生活に支障はないでしょうが、私たちの日常も、大袈裟に言えば、私たちの人生も無数の偶然の出会いに満ちていると思ったら、言葉の世界における偶然の出会いにすこし立ち止まってみるのも悪くないかもしれません。

分野・専門紹介—File 62

新型コロナウイルス問題から感じること

分野・専門名：日本史学

2020年4月現在、世界では新型コロナウイルスが流行し甚大な被害が生じています。特に報道などで注目されているのが政治・経済への影響ですが、新型コロナウイルスの影響は、潜在化していた社会問題を顕在化させたり、新たな社会問題を引き起こしたりしています。このため、感染症問題は単純に病原菌を特定し、ワクチンを開発し、治療方法を確立するという医学的なアプローチだけでなく、人文学も含めた多角的なアプローチで臨む必要があることが痛感されます。感染症問題は人災的側面もあるからこそ、人間への洞察が必要になると思います。

実は19世紀においてもコレラという極めて致死率の高い感染症が世界的に流行しておりました。私はこ



の時期の感染症問題について日本を事例に研究しています。たまたま感染症に関心を持って研究を始めたのですが、大学院生のうちに感染症の世界的流行という事態に遭遇するとは夢にも思いませんでした。こうした現代の状況は感染症の歴史研究をする上で極めて重要な知見を与えてくれますが、逆に過去の感染症問題も現代の感染症問題を考える上で大きなヒントを与えてくれると思います。

どんな研究がいつ役に立つようになるのかは、私たちにはわかりません。だからこそ、どのような事態にも対応できるように豊かな知見を備えた社会を私たちで作っていく必要があります。そのためにも自ら問いを探し出し、その問いに果敢に取り組んでいく「勇気ある知識人」の存在が求められると思います。名大文学部には「勇気ある知識人」を目指すうえで頼りになる教員、励みになる仲間、知識の糧となる豊かな文献があります。皆さん、一緒に文学部で勉強しませんか？

(博士後期課程3年・加藤 真生)

分野・専門紹介—File 63

異文化理解から「人間」を考える

分野・専門名：文化人類学

飛行機でスペインはマドリッドに降り立ち、そこからバスで約3時間北上、ブルゴスへ。そこからさらにレンタカーを借りて約30分、目的の村にようやく辿り着く。辺りの石造りの家々には人が住んでいる気配がほとんど感じられず、道行く人もまた見当たらない。村で唯一のカフェに入ると突然のアジア人の来訪に訝しげな視線を向けられる。私はコーヒーを注文すると挨拶もそこそこに、たどたどしいスペイン語でこう切り出したのである。

「ここに仮面を使う祭りがあるって聞いたんですけど——」



現地実習の様子

文化人類学という学問は世界中の社会、文化、宗教と共に生きている人々に焦点を当て、人間とは何かという問いを考えていく学問です。そしてその特徴の一つはフィールドワークを行うことでしょう。実際に現地へ自分の足で向かい、現地の人々から生の言葉を聞き、時にその人々と同じことを実践することで異文化理解を進めていき、そうして得られる情報を研究に反映させるフィールドワークは常に驚きと発見に満ちています。

文化人類学研究室ではこうしたフィールドワークを実際に行える、実習の講義も多くあります。たとえば愛知県奥三河で行われている「花祭」というお祭りに参加し、現地の人々に話を聞き、そして観察を行うことで情報をまとめ上げる「花祭ゼミ」と呼ばれる講義があります。

もちろんこうした伝統文化についてではなくても、個人で様々な研究を行うことができます！今いる学生の中には都市伝説や妖怪について、はたまた現代の観光について研究をしている人もいます。

フィールドワークがしたい、人間とは何か研究したいという人はぜひ、文化人類学を勉強してみたいか、がでしょうか？

(博士後期課程2年・吉村 宥希)

最近の文学部

遠隔授業に挑戦

授業をオンラインで始めて2週目。学生には読んだり書いたりじっくり課題に取り組むいい機会になるといいな。(CN)